「ストリートの人類学」研究会（国立民族学博物館）
２００５年6月１８日

グローバル化の中の都市混合言語シェン語── ストリート文化とケニアの国民統合

小馬　　徹（神奈川大学）

●ケニアには、諸言語共同体の意思疎通手段として国家語(national language) であるスワヒリ語ならびに公用語である英語が諸民族のコミュニケーション手段（リンガ・フランカ）として存在し、学校で教えられている。それにもかかわらず、新たなスワヒリ語、または「ピジン・スワヒリ語」（スワヒリ語を土台としたピジン語〔異言語間の意思疎通のための混成言語〕）としてシェン語が急速に発展しつつあるのはなぜか。
●若者がフィーリングを表すのに最適な言語がシェン語だというのはなぜか ― その活力の源泉はどんな仕組みになっているのか
●1960年代後半にはストリート・チルドレンの言語と見なされていたシェン語が、1990年代に電波の自由化と呼応して急速な展開をみせた。両者の間にはどんな対応関係があるのか。
●言語を作るのは誰か ― 国家かストリート（若者）か
●シェン語はケニア、東アフリカ、強いてはアフリカの統合（政策）にどのような影響を与えようとしているのか。

序. ケニア・ヒップホップ文化の中のシェン語
　　⇨ 別紙資料（マスメディアとシェン語）

Ⅰ. 背景としてのスワヒリ語の政治学
1. 東部アフリカとケニアをめぐる言語の概況
(1)アフリカの諸言語とケニア国内の諸言語　　⇨ 別紙（言語地図１）
(2)スワヒリ語の形成と展開
　i)アラビア商人
　　・（３～）７世紀頃、交易を求めてアフリカ大陸東海岸の島嶼部に進出
　　└正統カリフ時代（第４代カリフ・アリの死[661] 後約30年）の政争
　　・バントゥ語系諸言語＋アラビア語の豊富な語彙→クレオール化
　　・スワヒリ語はその総称 ― ケニアの言葉であり、且つタンザニアの言葉
　　・モンバサ方言とラム方言（以上ケニア）は、標準スワヒリ語の基になったザンジバル方言（タンザニア）よりもアフリカ（バントゥ）的
　ii)英国植民地政府
　　・東アフリカの共通語を構想
　　cf. スワヒリ語の標準化を目指してを「領土横断言語委員会」設立(1930)
　　・ザンジバル方言(*Kiunguja*)→人工的な標準スワヒリ語(Standard Swahili)
　　cf. *maneno ya kijingajinga*
　iii)タンザニア
　　・英国の言語政策を受け継いでスワヒリ語の公用語化を徹底し、育成
　　・→「造成スワヒリ語」(*Kiswahili sanifu*)
　　・アフリカでは類をみないほどの国民的統合を実現　cf. ソマリア
　iv)ウガンダ
　　・イスラム教と覇を競ったキリスト教ミッションが異を唱えた
　　・ガンダ王国がガンダ語の公用語化を強行に主張
　　・一時、学校でも教えられたが、その後普及せず
　　・近年は、ケニア（ナイロビ、国境地帯）の影響で、ピジン・スワヒリが普及
　v)ケニア
　　・現実的な判断 ― 英語は公用語、庶民の共通語スワヒリ語は国語

・海岸部 ― 母語。しかし、学校スワヒリ語とはかなり異なり、試験では不利
・内陸部 ― 母語ではなく、小学校で習う第二言語
・ナイロビ ― 内陸スワヒリ語<商用のピジン・スワヒリ語
・自前のスワヒリ語政策はなく、「造成スワヒリ語」の展開に完全依存

vi)独立後の東アフリカ三国の趨勢
・「ダル・エス・サラーム：ナイロビ::海岸：内陸::母語：ピジン」
・ cf.カンパラ（内陸）
・「スワヒリ語＝タンザニアの言語」視への傾斜

(3)タンザニアの言語政策

i)強力な国家機構による標準化・近代語化の推進
・国家スワヒリ語評議会(National Kiswahili Council; *Baraza la Kiswahili la Taifa* ― BAKITA)
・スワヒリ語調査研究所(Institute of Kiswahili Research; *Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili* ― TUKI)

ii)標準スワヒリ語の「裁定者」に！
★一切の権威はタンザニアから
・新造語の爆発的な増加 ― 科学技術の発展に対応
・「造成スワヒリ語」化の推進→専門のスワヒリ語辞書の編纂・刊行
・「造成スワヒリ語」の標準スワヒリ語化 ― 教育制度を通じてケニア全土に貫徹
・非標準スワヒリ語の発展を排除

2．ケニアの多言語状況　⇨　別紙資料（言語地図２）

(1)概況　⇨　別紙資料（「ケニアの多言語状況」）

i)リンガ・フランカとしてのスワヒリ語と英語

ii)民族的アイデンティティの核としての固有語（部族語）

(2)変化の方向

i)スワヒリ語の一層の「外国語化」
・タンザニアに対する一方的な受け身の姿勢
・全国一斉修業試験の成績 ― 都市のエリート校ほど悪化
cf. 標準スワヒリ語は単に試験のため（ＤＳ, January 4, 1988)

ii)言語政策におけるスワヒリ語の後退の歴史的背景
・独立直後、スワヒリ語は現在よりもずっと影が薄かった
●オミンデ委員会(1964) ― スワヒリ語の自由選択科目化。学童は不熱心に ― この時代に学童だった年齢層は、英語がうまくスワヒリ語が下手。
・ジョモ・ケニヤッタ ― 1974年10月31日、ケニア憲法第３章〔憲法〕第１部第34節第１項を「スワヒリ語を国家の公用語とする」と修正
・1975年 ― 「スワヒリ語と英語を国家の公用語とする」と再修正
・ダニエル・モイ ― 就任直後、「英語を前文書の公用記録語とする」という修正条項を追加
・マッケイ委員会(1981) ― 大学一年生時はスワヒリ語を必修とすることを勧告。しかし政府は黙殺

iii) →シェン語発展の土壌

II．ドットコム世代とシェン語

1．シェン語の形成

(1)シェン語・エンシュ語の生成環境

i)ナイロビの多民族・多文化・多言語状況
・特定の話者集団の某かの機能に答える話し言葉
・1960年代末か1970年代初めに発生
・シェン語という語は1984年初めに登場　cf. ナイロビ雑種、ナイロビ型スワヒリ語、スワヒリ語ナイロビ方言

ii)特徴
・コミュニケーション手段としての言語は既に存在
・若者のサブカルチュア、アイデンティティ、集団の団結の支持基盤

iii)言語環境に対する世代的な態度の差異

・若者: 母語、スワヒリ語、英語との関係に確たる方針をもたない。殊に、社会・文化的な側面で
・大人・教育関係者: シェン語・エンシュ語は適切な形での母語、スワヒリ語、英語の習得を阻害。外国文化の最悪の要素の影響を受けた望ましからぬサブカルチュアの発生に結び付けて受け止める

(2)二つのシェン語

i)シェン語
・イーストエンズで発生
・「第一言語」(first language)化

ii)エンシュ語
・エリート層（ウエストランズ）
・シェン語に対抗するシェン語の「社会方言」

2．<u>都市の言葉としてのシェン語</u>

(1)秘密の信号法(code)としての特徴

i)都市の密集した住環境 ― 特にスラム
・プライバシーの確保は不可能

ii)若者の言葉
・親に聞かれては不都合な情報の交換手段

iii)同一の意味内容を指すきわめて多数の語の併存
・girl: 30＋ ― *banana, mkuki, kirenge, kipusa, kago, chikii, malaika mayanga*
・police: 20＋ ― *sonyi, ponyi, karai, flik, mahindra, ako, pai, kachero, kahio, itina, wahia, karao*
・illicit brew: 20＋ ― *chang'aa, machozi ya simba, vepa,* spirit, Nubian gin, African dry gin
・bahang: 20＋, prostitute: 10＋
・性、密造酒、薬、恋愛沙汰、差し迫った危険の警告、法の執行者（警官）

iv)新語化の形態的特徴
・単純化、要素の切り詰め
・*ushago*→*shaggs*, *shago* →*osha*
★「ケニア・スワヒリ語」の標準語彙化

(2)都市言葉としての性格

i)都市の若者の感情を表現
・不寛容、硬直性
・田舎者の軽蔑 ― 都市生活の邪魔者視、単語　20＋

ii)都市生活の苛酷さを反映
・ *nutha* (<*nusu* (Sw)), *kwotidhe* (<quarter (Eg)) ― エステートでのパンの売方
・「盗む」*sanya* (< *sanya* (Sw))、単語　10＋

iii)★庶民の言葉を旺盛に取り込む
・→様々な世代・社会階層が相対的な秘密を守って交信できる慣用語彙の必要性

iv)秘密の信号法としての属性
・特に独創的な面はない
・<u>力動性の大きさ</u> ― 危険が大きい領域ほど新造語の速度が増す

3．<u>職業階層のアイデンティティ・マーカ</u>

(1)乗合自動車(*matatu*)乗組員

i)小型の乗合自動車（多くは日本製のミニバス）
・都市部の無学歴・低学歴層の若者たちを最も大量に雇用・吸収する産業部門
・小さな資本で運営、低料金、庶民の足
・不定時運行、客引きや満員を装うためのサクラ（員数）を務める若者たち
・マナンバ(*manamba*) : おしかけ、雲助

ii)口語であるシェン語が彼らの第一言語(first language)
・隠語(argot) を創出、次々と取り替え

・料金を客と駆け引き。乱暴な営業形態は交通警察官の目= 賄賂を強要する口実

iii)独特の符牒を常に用意

・貨幣: *chapaa, mnago, nyandu* 、一シリング: *chuma* 、五シリング: *Musebeni, king'ori, kobore*、十シリング: *ashara*、五十シリング: *finje* 、百シリング: *soo* 、二百シリング: *album* 、五百シリング: *Jirongo* 、千シリング: *ng'iri*。

・警官（「敵」）: *ako, flik, itina, kachero, kahio, karai, karao(karau), mabai, mahindra, ponyi, pai, sonyi, wahia*

・仲間のマナンバは*makanga* 、車掌は*conde*(< Eng. conductor)

・→ＦＭラジオが取り入れて標準化→新たな符牒の開発

(2) ストリート・チルドレン

・「盗む」の同意語が十を超える

・*sanya* (Sw.: 集める）→「盗む」

・食べること、食べ物を意味する語も多い ― 肉: *naymhama, nyaki, nyame*、ポテトチップス:*chipo, chibas*、「旨い」: *yamii !* （＝子供のシェン語彙）

・パン半斤: *nutha* (<*nusu* (Sw):半分）、四分の一斤: *kwotidhe* (< Eg. quarter)

(3) 中学校

・先生: *tije* (<Eng. teacher)、牛乳: *milo* (<Eng. milk) 、教室: *daro* (<Sw. darasa) 、停学: *saspi* (<Eng. suspension)、半期: *hafta* (<Eng. half term) 、規則に違反して捕まる: *bampwa*。

・他の中学校の名称を独特の仕方で変形

・Alliance Boy's High School: *Bush Boys* 、The Kenya Girl's High School: *Bomas* 、Pangani Girl's High School: *Pango*

・長たらしい語を簡略に、発音し易い音形に改変

・「半期」: *hafta* =half ＋term－ｘ ― 混成語(fusion, amalgam)=「かばん語」

・造語方は平凡だが、それが庶民的な生命力の源泉

(4) 大学

i)生活環境が複雑に

・学生会館: *styudi* (<Eng. student centre) 、図書館: *liabu, lib* (<Eng. library)、管理部門: *adimin* (<Eng. administration centre)、購買部: *shoppi* (<Eng. shopping centre)、学期手当: *boom* (<Eng. boom)

ii)特徴：スワヒリ語や民族語（固有語）の積極的な取り入れ

・「誘惑する」: *kukatia* ＜Sw. 不定詞化接辞"*ku-*" ＋「切る」"*kata*"の前置詞形"*katia*" （～のために〔に向かって、を用いて....〕切る」

・「（異性を）ハントする」"*kuhanya*" : ＜キクユ語＋"*ku-*"

iii)衒学的な気分を映す造語例も見

・チャパティ（種なしの平たいパン）: *dialogue* (<Eng.)

・投石用石: *air-to-air missile*

iv)エンシュ語と比べて一般に屈託がない ― 真のエリートの矜持

4．学校教育を通じた「想像の共同体」の下地

(1)Ｂ．アンダーソンの説

i)中南米の例

ii)ケニアの学制

・中学校は州を基準に学校を割り当て制 ― 県立高校ではほとんどが県内の生徒

・大学は全国が単一の枠組み

iii) cf. ゲルナーの現代教育観 ― 国家大で平準化した教育の必要性→公平性

(2)罰札制度の失敗

i)キプシギスの例

・1959年にAEO(Areal Education Officer)のBarclay 神父 (Mill Hill Cathlic) が導入

・キプシギス語（スワヒリ語）の使用禁止 ― 英語の強要

・４年次から（学年が上がる程厳罰） ― うつ伏せさせて尻打ち

・無口化、上級生の拒否、知り合いへの憚り

・無効化への対策　　ポケット→首から下げる

ii)沖縄の黒札との比較

・罰札（当時は「方言札」と呼ぶ）の教育への導入、明治40(1907)年。
金城朝永の怒り　[田中 1981:118-121]
・cf. 仏（ブルターニュ、カタロニア）1960年代まで、ポーランド（独支配下）、19世紀中頃から一般化した英（ウェールズ）やフラマン語圏
・元々はラテン語教育の能率化を図るイエズス会の工夫
・よく似た言語／全く異なる言語
・「恥」を誰も感じない

(2)ケニアの中学校文化とシェン語

i)都会育ちの生徒の存在
・多民族・多文化・多言語空間
・コミニュケーション・ツール、peer identity maraker

ii)「モノ」苛め
・シェン語を知らないことが口実に ― 田舎者狩り
・「恥」を梃子にシェン語を猛勉強

iii)親世代への反発
・「理由なき反抗」の年代、価値観・ライフスタイルの違い
・「親の世代に対する絶望がシェン語に向かわせるのだ」という常套句
・現代的な若者の生活様式への無理解への反発
・英語、スワヒリ語 ― 試験用のお仕着せの言葉

5．1990年代半ばの政治・電波の自由化

(1)Radio Kenya →Voice of Kenya (→Kenya Broadcasting Corporation)

i)1928年8 月創設
・BBC とほぼ同じ頃
・白人入植者用

ii)独立(1963 年12月) 後
・政権党ＫＡＮＵの御用放送 ― 大統領の動向、演説の放送が主体
・誰も信用しない　cf. Kenya Times 誌

(2)ベルリンの壁崩壊＝冷戦構造の終焉

i)複数政党制の再導入
・経済援助の条件

ii)電波の自由化＜言論の自由・政権交代を求める運動、ＮＡＲＣ
・ＦＭ局の簇生
・放送の多様化 ― 民族語、買い物情報、渋滞情報も
・白人口語英語の分かりにくさ→スポーツ放送多用
・聴取者層の大部分が若者→

(3)若者の取り込みとポップ・カルチュアの勃興

i)音楽番組の多用

ii)音楽シーンが一変
・ベンガ、ターラブ、ツイスト、リンガラ→ＨＨ、レゲエ、Ｒ＆Ｂ、ラップへ
・歌詞 ― シェン語、アメリカ黒人のスラング英語と呼応

iii)歌手はストリート・チルドレン出身
・シェン語が第一言語
・音楽の中に生まれる ― ホームレスの家族は路上で歌って銭を乞う
・生粋の都会人、ダイハードな感覚 ― 若者の気分に適合
・出世譚、ロールモデル化
・ストレートなアメリカ音楽のコピー。「ケニア音楽はない。あるのは音楽のみ」

iv)Ｙ－ＦＭ開局
・2004年末、全国ネット、ウガンダ・タンザニアでも聴取
・ニュースをシェン語で放送→他局も採用
・座談・討論・評論・ドラマはシェン語での放送が一般化
・アナウンサー・ＤＪは、スワヒリ語・英語・シェン語能力が必須

(2)活字メディアの対応

i)新聞のカートゥンをシェン語が席捲　⇨別紙（漫画）
・第13クラス接頭辞*ka-*(スワヒリ語では欠）の頻用

cf. 2004年の米語の流行語: Mess-in-potamia (=quagmire), Iraqnam

ex. I only said.... *buda ya* Dot-com, *si unichotee angalau kafegi kamoja tu ....Ukidedi nitasema nilimanga nini yako....?*

buda :father
si :not →why not
unicholee : *chota*, give smthng. の前置詞形（スワヒリ語）
angalau :at least
kafegi kamoja tu: *fegi*, cigarette *moja*, one (Sw.)
ukidedi : *u-ki*, you-if *dedi*, be dead
nitasema : *ni-ta*, I will *sema*, say (Sw.)
nilimanga : *ni-li*, I- 過去 *manga*, eat
nini yako : *nini*, what (Sw.) *yako*, yours (Sw.)

「こう言っただけさ。“ドットコムの父ちゃん、ちびた煙草一本位くれたっていいだろう。あんたが死んだ日にゃさ、世話になったていうからさ”」

ii)2003年、East African Standard 金曜付録
・*The Plus* ― 最初の芸能専用マガジン（を標榜）
・“One on One” ― 芸能人ゴシップ欄

iii)Sunday Nation
・*Buzz*で追随
・“Around and About” ― 芸能人ゴシップ欄

iv)「セレブリティ文化」の創出

v)流行歌の歌詞起源のシェン単語
・*kujizi*（恋に落ちる）: Namelessの“Juju”から
・*mossmoss*（ゆっくり）: Ann Wakesho の同じタイトルの歌から
・*juala*（コンドーム）: Circute & Jo-el(のルオ語) の同名の曲
・*watoi*（子供[<Sw. *mtoto*, 子供]）も同じ曲から

6．大人たちの対応

(1)教師 ― 大学でも
・細かい説明に使用 ― 生徒の理解の容易さのゆえ
・シェン語を交えて若者の理解者であることをアッピールして、人気を買う
・年齢層は無関係

(2)政治家

i)“Kalonzo *Tosha*!”
・cf. “Radio Citizen Tosha !”, Kenya 2004 Sean Paul Tosha!

ii)ワマルワ・キジャナ
・2003年の国会: ケニア人の肌にあったシェン語を将来国会での論述にと演説

iii)“*unbwogable*”
・ＮＡＲＣ（虹の連立国民連盟）が2002年総選挙でキャッチフレーズに
・“*bwogo*”（ルオ語：「打ち破る」）＋“un-”, “-able”
・ラップ・デュオ GidiGidi & MajiMaji の曲のタイトル
・公式のキャンペーン・ソングに
・演説の最後: コーラス部分“Who can *bwogo* me?”を歌う

7．スワヒリ語に与えた衝撃

(1)自発的で自然な造語

i)直接的で、簡潔←→「造成スワヒリ語」の重苦しさ、規範性
・分かりやすさ、習得の容易さ
・誰にも開かれた造語法
・basket ball game:*bako, bake / mpira wa vikapu* (lit. ball of the baskets)
・lawn tennis: *leno*; foot ball (soccer): *futa*; rugby: *ruuji*;
badminton: *badi*

ii)学術用語にもそのまま適用
・biology: *bayo / biolojia*
physics: *phiso, phiki / fizikia*

mathematics: *matho*; chemistory:*kemo*; English: *engo*

iii)シェン語の言語として「美しさ」

・生き生きとした表現力

Hizo motii (morenga) huenda kama zinafly. Na huendeshwa na miguys bodii bodii. [*motii* :car, cf. *mothi*: lady]

"Strong people, well-built people" — 何という無味乾燥！

"*Mi-guys bodii bodii*" — スピード感、リズム（セクシャルな仄めかし＜車と女性のアナロジー）

・"*Mungu* one" （誓いの言葉）

(Catherine Gicheru & Roy Gachuhi, DN, March 14, 1984)

iv)タンザニア側の注目

・タンザニア人学者がシェン語を研究 — 危機感も

・辞書を刊行 — ケニアには「ストリートの辞書」のみ

(2)首座都市の威力

i)首座都市(primate city) — 地理学

・国家・地域の最大の都市

・行政、経済、通商、文化的なハブ — 全域に影響が及ぶ

ii)文化的影響

・首座都市住民の受け入れたあらゆる要素（技術、音楽、踊り、文学、ファッションなど）を周縁の住民が模倣

★シェン語からの洞察 — 言語の領域でも妥当

(3)ナイロビ

i)東アフリカの「経済首都」

・ eg. ケニア航空

ii)大陸・地域・国際機構の本部

・UNEP, Habitat, Shelter Afrique, ICIPE, All Afrina Confernce of Churches

・ cf. 別添新聞記事

iii) ニェレレのタンザニア国民への言葉

・"*Mkitaka kuona London, nendeni Nairobi*". （ロンドンが見たけりゃ、ナイロビにお行き）

(4)シェン語の社会的意味

i)標準スワヒリ語・英語への影響

・綴り字の不正確化

・シェン語は文字表記と発音の乖離が大きい（いわば音訓読み）

・七母音（諸固有語）の影響 — スワヒリ語は五母音

ii)★ケニアの若者が造語に主体性を発揮可能！

・標準スワヒリ語や英語以上に自信をもてる言語 →第一言語化

★シェン語の「裁定者」！ -- 自ら操作可能

iii)国家的アイデンティティの付与

・仲間言葉→学校言葉→世代語→都市混合語→

・部族主義を超越するコミュミケーション手段

★国（家）語へ成長する可能性も

(5)シェン語のスワヒリ語圏への浸透・拡張

i) ケニア、ウガンダ

・かつてはタンザニアからスワヒリ語を受容

・標準化のための機構不在

ii) ケニアでの造語

・限定的 — *ukimwi (ukosefu wa kinga mwili), AIDS*

iii) 傾向の転換

・シェン語の脈動→日常のケニア・スワヒリ語への流入

・→標準スワヒリ語・英語への流入 — *malatu, manamba, manyanga* ←→*metumba*

☆シェン語が言語単位で受け入れられる可能性も — 既にダルで挨拶を受容

★将来のスワヒリ語語彙の主要な源泉 — 単なる「都市の若者の隠語」視は不可

iv)標準スワヒリ語への「悪影響」

・発音・綴字の自由度の許容性＜七母音の固有語の影響

・スワヒリ語・英語の「標準性」への脅威 ― 特に書き言葉
・既に兆候あり --- 試験成績の悪化も（＜第一言語化）
v)対処の方向性
・シェン語標準化機構の設立
・出版物による自然な淘汰 ― 最もよく流通したものが標準化
(6)スワヒリ語・シェン語とアフリカの広域的地域形成
i)スワヒリ語の地位の目覚ましい向上
・アフリカ人作家の問題：「どの言語で書くか」 ― グギvsアチェベ、ショインカ
・スワヒリ語がＯＡＵの公用作業語に
ii)シェンゴと造成スワヒリ語
・東アフリカ三国での亀裂？
★アフリカ統一の手だてと黙されるスワヒリ語の地位を脅かすか？
(7)若干のコメント
・国家アイデンティティの創出に成功したタンザニアのスワヒリ語政策は有名
・対抗する二つのスワヒリ語の対照的な位相の鮮やかさ
・ケニアのシェン語は、ほとんど知られていないストリート言語。その（ことに言語外現実の）は豊かな研究領域

【結論】
★ストリートの論理 ― 掌中に置ける自前の言葉の希求
★シェン語 ― 東アフリカで進行中の民衆の手による「言語革命」

《参考文献》

Abudlaziz, M. H. and Ken Osinde
1997 "Sheng and Engsh: Development of Mixed Codes among the Urban Youth in Kenya", *International Journal of Sociology of Language*, 125:43-63.
Alego-Oloo
1987 "Why Local Languages Are Important", *Standard*, October 14.
Amidu, Assibi Apatewon
1995a "Kiswahili: People, Language, Literatute and Lingua Franca", *Nordic Journal of African Studies*, 4(1):104-125
1995b "Kiswahili, a Continental Language: How Possible Is It? (Part I)", *Nordic Journal of African Studies*, 4(2):50-72.
1996 "Kiswahili, a Continental Language: How Possible Is It? (Part II)", *Nordic Journal of African Studies*, 5(1):84-106.
Gicheru, C. ／Gachuhi, R.
1984 "Sheng: New Urban Language Baffles Parents, *Daily Nation*, March 14.
Iraki, X.
2002 "Benefits of Progressing from the EAC to Swahili Republic", *People Daily*, September 23.
Jonson, Frederick (ed.)
1939a *A Standard Swahili-English Dictionary*, London: Oxford University Press.
1939b *A Standard English-Swahili Dictionary*, London: Oxford University Press.
Kariku, Patriku
2001 "Kiswahili Is Exciting When Hosts Are Not Showing Off", *Daily Nation*, August 16.
Khalid, Abdullah
1978 *The Liberation of Swahili from European Appropriation*, Nairobi: Kenya Literature Bureau.
King'ei, Geoffery K. & Paul M. Musau
2002 *Utata wa Kiswahili Sanifu (toleo la kwanza)*, Nairobi: Didaxis.
Kioni, Kinya
2002 " 'Sheng' Takes Its Toll on Performance of Languages", *Kenya Times*,

March 26.
Krapf, Ludwig
1969(1982) *Suahili-English Dictionary*, New York: Negro University Press.
Lieberg, Ali A.
1994 "Language Colonialism and Development — And the Case of Kiswahili as the Official Language", *Standard on Sunday*, December 30.
Mazurui, Ali／ Mazurui, Alamin
1998 *The Power of Babel — Language & Governance in the African Experience*, Chicago: University of Chicago Press.
1999 *Political Culture of Language — Swahili, Society and the State*, New York: Institute of Global Culture Studies, State University of New York at Bringhamton.
Mbaabu, Ireri and Kipande Nzunga
2003a "Sheng — Its Major Characteristics and Impact on Standard Kiswahili and English" - Introduction to the *Sheng-English Dictionary (vide infra)*
2003b *Sheng-English Dictionary: Decipherring East Africa's Underworld Language*, Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.
Moga, Jacko
1994 "Sheng Language", *Radar*, 1:3-17.
1995a "Chokora", *Sheng*, 1:4-6, 10-11, 13-14, 17-20.
1995b "Chokora", *Sheng*, 2:4-6, 10-12, 14, 21, 23.
1995c "Sheng", *Radar*, 2:11-16, 21-23.
Moga, Jacko & Dan Fee (eds.)
1995 (1993) *Sheng Dictionary*, 2nd ed., Nairobi: Ginseng Publishers.
2000 *Sheng Dictionary*, 4th ed. (Magazine ed.), Nairobi: Ginseng Publishers.
2004 *Sheng Dictionary*, 5th ed., Nairobi: Ginseng Publishers.
Mukama, R. J.
1991 "Recent Development in the Language and Prospects for the Futute", in Hansen H. B. & M. Twaddle (eds.) *Changing Uganda*, London: James Currey, pp. 334-350.
Mungu, Joe
2001 "For Ngugi, the Centre Does Move", *Daily Nation*, March 17.
Mwansoko, H. J. M.
2003 "Swahili in Academic Writing", *Nordic Journal of African Studies*, 12(3): 265-276.
Mayama, Geoggrey M.
1988 " 'Sheng' Could Develop into a Faster Novel Language", *The Sandard*, January 14.
Ngithi, M. E.
2002 "The Influence of Sheng among the Kenyan Youth on Standard English" (submitted in partial fulfullment of the requirement for the degree of bachelor of arts), Department of Linguistics and African Languages, University of Nairobi.
Njogu, Kimani
2001 "Why We Must Elevate the Role of Kiswahili", *East African Standard*, August 10.
Ochien, Philip
2004 "English as a Spear the Enemy", *Sunday Nation*, September 29.
Oduke, Charles
1988 "Sheng's Very Special Role", *Daily Nation*, February 4.
Ogech, Nathan Oyori
2003 "On Language Rights in Kenya", *Nordic Journal of African Studies*, 12(3): 277-295.
Richard, Harrison
1984 "Choosing the Right Kind of Kiswahili for Kenya", *Daily Nation*, January

6.
Rodwell, Edward
2001 "When Kiswahili Was Still Young", *East African Standard*, March 21.
Rono, R. K.
2001 "We Have No Respect for Kiswahili", *Kenya Times*, March 7.
Roy-Campbell, Z. M.
1995 "Does Medium of Instruction Really Matter? — The Language Question in Africa: Tanzanian Experience", *Utafiti (New Series)*, 2(1-2):22-39.
Ruo, Kimani
1984 "Kiswahli Role Is Underscored", *Daily Nation*, September 13.
Ssekamwa, J. C. ／ Lugumba, S. M. E.
A History of Education in East Africa, Kampala: Fountain Publishers.
Sserwanda, G.
1993 "V-P Raps Swahili — Kisekkan on Swahili Language", *The New Vision*, March 17.
Tasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili
1996 *English-Swahili Dictionary — Kamusi ya Kingereza-Kiswahili*, Dar es Sala aam:Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.
2001 *Kamusi ya Kiswahili-Kingereza (toleo la kwanza)*, Dar es Salaam: Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.
wa Goro, Kamau
1994 "Writers and the Cultural Conflict", *The People*, Febrary 27 - March 5.
Wandeto, J.
1994 "He Vowed Never to Speak Swahili", *Sunday Times*, January 30.
アンダーソン、ベネディクト
1997 『増補　想像の共同体 — ナショナリズムの起源と流行』（白石さや・白石隆訳）、ＮＴＴ出版。
川田順造
2004 『コトバ、言葉、ことば — 文字と日本語を考える』青土社。
ゲルナー、Ｅ.
2000 『民族とナショナリズム』（加藤節監訳）、岩波書店。
小馬　徹
1979 「“象（テンボ）は鼻が長い”か？ — スワヒリ語の総主論序説」、『一橋研究』4(3):115-132。
1980 「“象は鼻が長い”構文の提題性をめぐって — スワヒリ語の総主論ノート」、『一橋研究』5(2):145-154。
2002 「国家と民族 — 多文化の中の自他意識」、江渕一公・松園万亀雄（編）『改訂文化人類学 — 文化的実践知の探究』放送大学教育振興会、100-123 頁。
2004 「ma が差した話 — スワヒリ語のレッスン」、『言語』33(8):4-5 。
2005 「ケニアの勃興する都市混合言語、シェン語 — 仲間語から国民的アイデンティティ・マーカへ」、『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』、神奈大学２１世紀ＣＯＥプログラム推進委員会、2:125-135 。
宮崎久美子
2003 「ウガンダにおける言語政策の推移」、『スワヒリ　&　アフリカ研究』13:93-107 。
宮本正興
1991 『ことば・文学・アフリカ世界』、大阪外国語大学アフリカ研究室。
西江雅之
1974 「スワヒリの詩 — ムワナクポナの詩」、『言語別冊１　アフリカの文化と言語』、167-190 頁。
レヴィ＝ストロース、Ｃ.
2001 『悲しき熱帯 II』（川田順造訳）、中央公論新社。
田中克彦
1978 『言語からみた民族と国家』、岩波書店。
1981 『ことばと国家』、岩波書店。